

消える地名か 武田牧場

延島 冬生（日本地名研究所会員）

要 約

小笠原諸島・父島にある地名「武田牧場」の発生、場所、由来、改名、消滅への動き、関連する植物名を考察する。

I. はじめに

小笠原諸島・父島に武田牧場と呼ばれた場所がある。「〇〇牧場」などの施設名は地名では無く、準地名とする見解もある。しかし、東京近郊の「平林寺」は、寺という施設名であるとともに、自然観察会、写真撮影会などで寺周辺を含めた地名として現に使われており植物標本の採集地名ともされている。父島では青灯台 [あおとうだい] 又はその省略形の青灯 [あおとう] は、灯台そのものを指して使われることは殆ど無く、その近くの護岸や船着場を指して使われている。筆者は、地名と準地名を区別することは言語生活上意味が無いと考え、地名として論考する。

II. たけだぼくじょう 武田牧場 Takedabokujou

1. 位置

東京都小笠原村父島字桑ノ木山

小笠原諸島（以下「小笠原」と書く。）・父島北部東側、中央山（延島、1998～）の東側で同峰から南東に連なる父島最高峰（326m 高）北向き斜面の比較的平坦なところ（図1）。乾燥した低木の疎林と矮性低木林が広がる（図2）。一時牛の放牧場であった。戦前、「中央山武田牧場附近に於ける峯通り岩石地」（豊島、1938a）、「コバトベラは父島武田牧場の陽光充分なる岩山附近に自生」（豊島、1938b）し、「おほみとびらのき（新種）武田牧場ニ多ク生ヘテキル」（津山、1935）など関係者には知られ、「父島中央山国有林」（豊島、1938c）の一部ともあった。

土地は国有林野である。

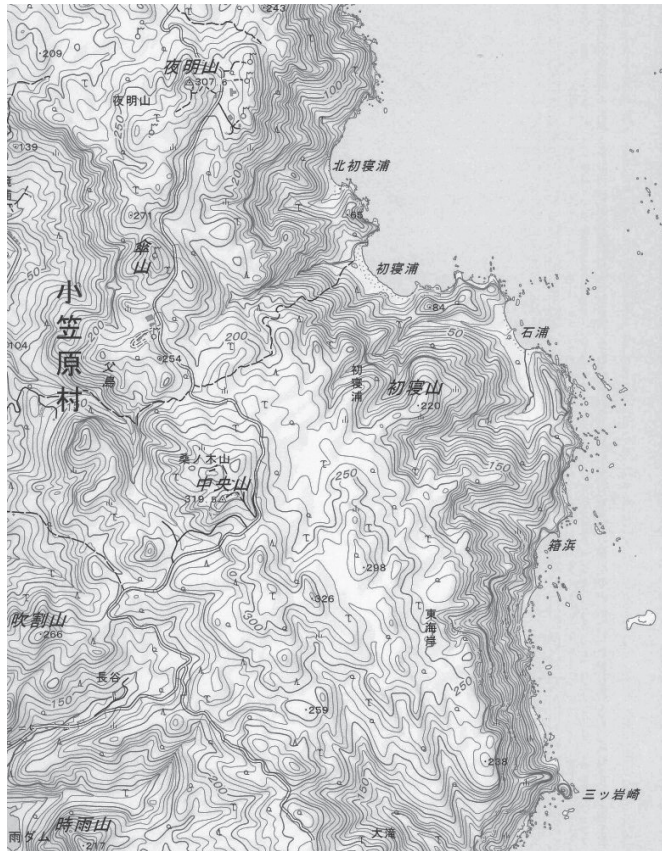


図1 中央山東側一帯

本図は国土地理院2万5千分1地形図父島（平成26年）の一部を使用したものである。

2. 由来

小笠原ではよくある「人名地名」の一で明治末期には「武田牧場ハ島ノ東側ニ位シテ連樹谷ニ尋テ草木ノ繁茂セル所ナルガ…開拓ノ当初武田某ノ牧牛セシコトアリシニ因リテ今ハ単ニ其名ヲ止ムルノミ」（服部、1906a）とある。

宅地・畑地は開墾して土地を払い下げられたが、「本島ノ如キ豆大ノ島地ニアリテハ到底牛ノ如キ大動物ヲ放牧シテ耕墾ノ地ヲ狭少ナラシムルノ患アルヲ以テ従来放牧スル者ノ外島廳新ニ牧場ヲ開クヲ許サズ」、「明治15年島民協同シテ一牧場ヲ南崎ニ開設シ…目下該牧場ハ廢止ス」（小野田、1888）とある。先住民の既存牧場経営は許可するも、本土からの開拓者には牧場目的の開墾は認めなかった。その牧場に日本人名がついたのは、この例だけである。

武田は1878（明治11）年北袋沢に設置された勸農局出張所の所長 武田昌次 [たけだまさつぐ] と思われ、1879（明治12）年青龍丸で赴任（小花、1878）している。勸農局出張

所が「牛種ヲ改良スルタメ」（小野田、1888）、武田昌次が意大利亜蜜蜂（セイヨウミツバチ）2箱とともに洋種牛3頭を導入した（農林省、1957）。

「現在牧場（明治十七年調査）」（山方、1906）には父島にある7牧場の内、2牧場（表1）が「武田牧場は南崎と中央山に二つあった。」という伝承に合致する。

武田の在島期間は短いと思われるが、牧場名として残ったのは本土からの開拓者に組合を作らせ山林の使（占）用のための書類は官で作成「島民協同」の形式を整え牧場を開くことができた故と思われる。

しかし、食用の種牛を放牧で増やし開拓者に払い下げる目論みは、うまくいかなかったようである。小笠原の統治機構が1880（明治13）年、国家中央機関（内務省）から地方機関の東京府に移管し、勸農局出張所は廃止されたことにより営農指導機関が無くなったこと、放牧では育種がうまくいかなかったこと、開拓者が開墾、農業には熱心でも畜産にさほど関心を示さなかったようであったことなどの要因が考えられる。

南崎では、先住民は「ブルビーチ」（Bull Beach 牛海岸の意）（延島、1999）と呼び、居住者に因むジョンビーチ（John Beach）（延島、1999）という地名が生まれるという変動があり「（南崎の）武田牧場」という日本語地名は早くに消えたと思われる。

昭和初期には「現在牧場としては僅に聳島あるのみ」（東京府、1929）と記録されている。

一方、「（初寝浦の）武田牧場」は、初寝浦の海岸から遠く、初寝山（延島、1998～）山麓でもなく、この一帯を指す適切な地名が無く「武田牧場」という地名が残ったと思われる。

武田牧場の文献初出は、今のところ1899（明治32）年（著者不詳、1899）。昭和初期にもある（正木、1927）。

表1 現在牧場（明治十七年調査）要約表

	其三	其四
位置	南崎 西南海に面し東北山を凸凹の地	初寝浦 東方は海に面し南西北は山を負い凸凹の地
反別	八町歩 官有地	十町四反歩 官有地
水草	溪流三流早燥の候も涸渇することなし	溪流三流早燥の候も涸渇することなし
樹木	雑木散立し暑及風雨を避くるに足る	前同断
地質	粘赤土	粘赤土
牛	二十四頭	六頭
着手年月	明治十四年一月	明治十五年四月
家屋	牧夫舎一棟逐込柵一ヶ所但周囲柵のみ雨覆なし	前同断
牧主	父島牧牛組合次長 當島二子村平民内藤治兵衛	父島二子村住平民 牧牛組合次長内藤治兵衛

注) 文中の主な事項を抜き出し要約した。

3. 範囲

地名は使う人により、時代により異なるが、中央山以東、父島最高峰以北、同峰から北に伸びる尾根に囲まれ、北は石浦〔いしうら〕に注ぐ流れが落ちる小さな滝までの比較的平坦な場所であろう。丈藪山〔じょういやま〕（延島、1998～）と一部重なると思われる。

1905（明治38）年、植物採集に来島した服部（1906b）は「夜明山ノ東麓ヲ繞レバ前方遙カニ武田牧場ノ森林ヲ展望スルヲ得ベシ」としている。今日、夜明山（延島、1998～）南東肩にある「初寝浦展望台〔はつねうらてんぼうだい〕」から中央山方面を展望しても、武田牧場の範囲を認識することが出来ない。当時は、中央山東側と父島最高峰北の斜面は森林が伐採されたまま放置され二次林があったか、又は畑となっていた可能性がある。当該斜面は今日ヒメツバキを主とする亜高木～高木二次林であるのは偶然ではなからう。

低木の疎林内で放牧し、自然地形の岩尾根、溪流端にある小滝、人の通行も阻まれる矮性低木林が牧場界となっていたと思われる。

豊田（1975a）は「戦前の武田牧場は当林内の南部から大滝地内へかけての丘陵地を呼称していたと考えられる。」と広く推定している。

他方、「現在の中央山東平には乾性低木林の他に、二次林と思われる組成の単純なマツ・ヒメツバキ林になっている場所も広くあるので、おそらく牧場はそうした場所で営まれていたものと思われる。」（清水、2009）とする見解もある。

牧場は、開墾と異なり役所には出来るだけ広く許可をとり、実際の使用範囲はかなり狭かったと想定される。

放牧のための開墾を許さなかった小笠原島庁の方針から、原生林を伐採しての開墾は考えにくい、主たる場所ではないが二次林も牧場の範囲とした可能性はあり得る。

服部は、ここでも植物採集をしているが、ムニンノボタン採集地は「初寝」、「初寝浦」、ハツバキ、チクセツラン等は「武田牧場」と区別している（表2）。

津山 尚は、ムニンノボタンは「武田牧場オク」、マルバケヅメグサは「武田牧場凸ハゲ」（表2）とその他の武田牧場採集標本と区別している。

「武田牧場オク」は場内かその先かどちらの理解も可能であるが、両者とも武田牧場東境を自然地形で理解していたと思われる。

4. 武田牧場入口

「中央山以東武田牧場入口マテ」（著者不詳、1899）との記述があり、牧場入口があったと推定される。地形的に牧場に牛を追い込み又連れ出す場合、周囲（この場合、南、西、北の三方向）から下がりきった地点が入口適地と思われ、都道旧道（現アカガシラカラス

表2 採集地「武田牧場」等

登録番号	04105	04106	02778
採集地	日本 父島 初寝浦	日本 父島 初寝	日本 父島 武田牧場
採集年月日	1905年7月25日	1905年7月25日	1905年7月25日
採集者	服部 広太郎	服部 広太郎	服部 広太郎
同定情報 現行	<i>Melastoma tetramerum</i> Hayata	<i>Melastoma tetramerum</i> Hayata	<i>Drypetes integerrima</i> (Koidz.) Hosok.
和名	ムニンノボタン	ムニンノボタン	ハツバキ
元のラベル	父島, 初寝浦	父島初寝	父島武田牧場

登録番号	04114	00733	00621	00018805
採集地	TITI-ZIMA 武田牧場 オク	日本 父島, 武田牧場, 凸ハゲ	日本 父島 武田牧場	日本 父島 武田牧場
採集年月日	1930年8月10日	1930年7月27日	1930年7月27日	1940年6月24日
採集者	津山 尚	山本	津山 尚	津山 尚
同定情報 現行	<i>Melastoma tetramerum</i> Hayata	<i>Portulaca boninensis</i> Tuyama	<i>Alternanthera sessilis</i> (L.) DC.	<i>Callicarpha parvifolia</i> Hook. et Arn.
和名	ムニンノボタン	マルバケヅメグサ	ツルノゲイトウ	ウラジロコムラサキ
元のラベル	武田牧場 オク	TITI-ZIMA, 武田牧 場 凸ハゲ	武田牧場	Bonin Isl. Titizima, Takedabokuzyo ad sumxxxx collis *

* 4文字くらい不明。

登録番号	00018990
採集地	Bonin Islands: Chichijima, entrance to Takedabokujo
採集年月日	1980年12月23日
採集者	津山 尚
同定情報 現行	<i>Lantana camara</i> L.
和名	シチヘンゲ
元のラベル	武田牧場入口

注)「植物／UMDB（東京大学総合研究博物館データベース）海洋島植物標本データベース」を編集。
<http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DShokubu/PHPspm2/Japanese/recordlist.php>

バトサンクチュアリ内自然観察路)の初寝山 [はつねやま] (延島、1998～) 道分岐点あたりと考えられる。

津山は1980(昭和55)年の植物標本採集地を「武田牧場入口」(表2)としている。地形的に入口は符合する。

牧場西側が公道(奥村-旭平-夜明山-連珠谷-扇浦に通ずる道路)に接していたとすると公道に接する範囲及び入口付近には柵があったと考えるのが自然であろう。

5. 旧日本軍の利用

1944（昭和 19）年、島民の強制疎開とともに加速的に旧日本軍施設などが島内各地に造られ、武田牧場辺りでは南部に海軍と伝えられる軍施設が設置され、露岩の頂は平にされ対空施設、監視所などが作られ、その間を繋ぐ通信ケーブルが電柱を立てて作られたようである。今日、その遺構、跡があるものの、一部を除き砲台、トンネル等の大規模な改変、利用の痕跡はない。

6. 新種の宝庫

東京大学総合研究博物館（2017）には、明治期からの小笠原植物標本が保管されインターネットで閲覧できる。「採集地 武田牧場」で検索すると多数の標本がヒットする（検索機能が十分でなく、細かく見るともっと多い。）。太平洋戦争以前のものでは以下のものがある。

1905 年	服部廣太郎採集	17 点
1912～1917 年	西村茂次採集	22 点
1930～1940 年	津山 尚採集	93 点
1932 年	原 寛採集	37 点

こうした標本から、新種（小笠原固有種）が多数発表された。

又、植物だけではなく 1937 年採集され、戦後オガサワラハンミョウと命名小笠原固有種と発表された動物（昆虫）もある（国立科学博物館、2017）。



図 2 東平の疎林

7. 改名

中央山東平 [ちゅうおうさんひがしだいら] 注 Chuuousan-Higashidaira

注 学術参考保護林看板(図3)は [ちゅうおうざんひがしだいら] とふりがながある。小笠原返還直後の調査に加わった前述の津山(1969;1970a;津山・浅海、1970)は報告書等を書いており、その中で武田牧場辺りを次のように指摘している。

「注意すべき植生の描写

初寝山およびその附近の丘陵地域

夜明山から中央山に到る公道の東部、特に初寝浦南部の初寝山およびその南部の2、3の丘陵地帯は一般に頂部の平坦な乾いた地帯であり、土壌や岩石を露出した部分もある。一般に昔から住居のなかった地域でありかつ、農林業の対照 [ママ] とならなかった地帯であるので、上記の道路との間にある小川および湿地を含む低い地域と共に本来の植生が殆ど破壊を免れて残っている。…ここに固有種が最も多く、特異の植生形態の中にそれが保存されている」(津山、1970b)

しかし、明治期から昭和戦前期によく使われていた「武田牧場」という地名は一度も登場せず、「武田牧場」は俗称であると公的報告書等から放逐されたと思われる。

学術的報告書の市民向け解説書の性格を持つ『小笠原の自然・原色写真編 解説編』(津山・浅海、1970)では昭和戦前期の写真キャプションに「武田牧場」(津山、1970c)とあるが、小笠原返還直後の調査写真2枚とも「中央山東側」(津山、1970d)としている。

1968(昭和43)年小笠原返還にあわせ小笠原総合事務所国有林課が設置された。国有林第2次地域施行計画(昭和50年度～59年度)により保護林が設けられ、「中央山東平学術参考保護林」とされた(豊田、1975b)。

この時設置された保護林名(表3)を見ると、「武田」という個人名を使わなかったというだけではなく、意識的に旧地名を避けたと思われる。日本国にとって、小笠原は幕府による延宝年間の巡検、文久年間の回収、明治政府による領土確定・再開拓がありながら、太平洋戦争敗戦による支配喪失の土地であった。小笠原返還という四度目の回収事業は、確実に主権が確保されなければならないものであったと考えられる。

国有林野にあっては、戦前の小笠原営林署による管理を復活させることが重要なことであった。その際、強制疎開された旧島民による所有権・利用権、小笠原返還前の1946年から帰島した欧米系島民の山林利用による入会権などの主張がもし出て来るとすると、好ましいものではないと思われ、こうしたことが地名改変の背景にあったと推定される。

国有林野内における保護林名は管理者が命名するものであるが、国民の財産を管理している故、命名には当該地の歴史性、地域性に充分配慮することが望ましいと思われる。

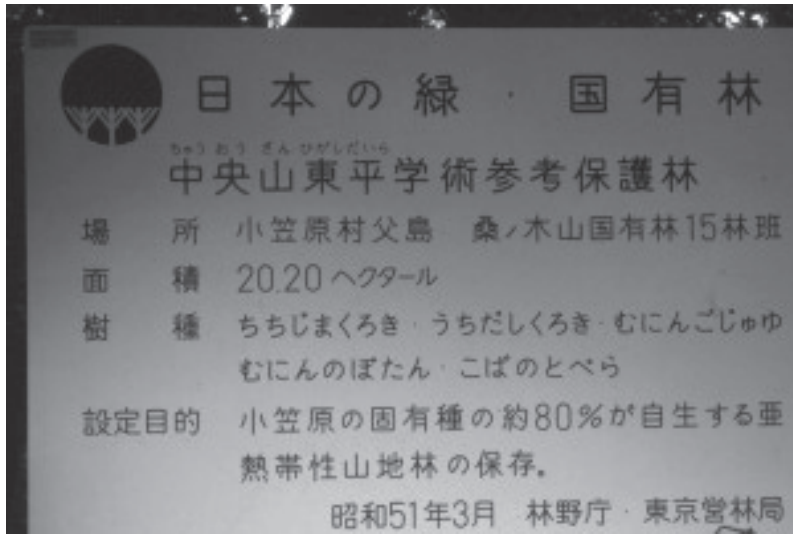


図3 学術参考保護林の看板

表3 学術参考保護林（父島一部）

名称	所在地	地元の呼称	
瀬戸見晴台	父島北東部	ろんばん、長崎	*
夜明平	夜明山北方	旭平、ビッグフラット	*2
中央山東平	中央山東側	武田牧場	*3

* ろんばん 小笠原諸島地名事典 Place Names 父島列島の地名
http://bonin-islands.world.coocan.jp/Placenames_Chichi.html

*2 あさひだいら 小笠原諸島地名事典 Place Names 父島列島の地名
http://bonin-islands.world.coocan.jp/Placenames_Chichi.html

*3 たけだぼくじょう 小笠原諸島地名事典
<http://bonin-islands.world.coocan.jp/PlaceNames.html>

8. 消滅か

小笠原返還後、武田牧場辺りは父島の植物、特に小笠原固有植物がまとまって生育している地域であることに変わらず、植物研究者は武田牧場に足繁く通い、旧島民もその呼称を使い、武田牧場という地名は生きていた。

その後、都道夜明道路改修の際、旧道西側に現道が新設され、旧道は行き止まりの廃道となった。更に、2003（平成15）年林野庁関東森林管理局（関東森林管理局、2017）により武田牧場とほぼ重なる範囲に「アカガシラカラスバトサンクチュアリ（東平アカガシラカラスバトサンクチュアリ）」が設定され（図4）、その上、世界自然遺産登録地として環

境省によりノヤギ・ノネコ侵入防止柵が設置された。有意義であるが自由な通行は制限されるようになった。

清水（2009）は武田牧場附近の継続調査報告書で「この一帯は武田牧場と呼ばれていたようである」としつつ、中央山東平を採用している。

豊田（2014）は『小笠原諸島固有植物ガイド』で中央山東平、東平とし武田牧場という地名は掲載していないようである。

行政が中央山東平という名を使い、その結果省略形、東平〔ひがしだいら〕が使われ出し、島民が訪れる機会が減り、かつて牧場があったことを知らない島民が増えてきた。武田牧場という特異な地名は消滅するのであろうか。

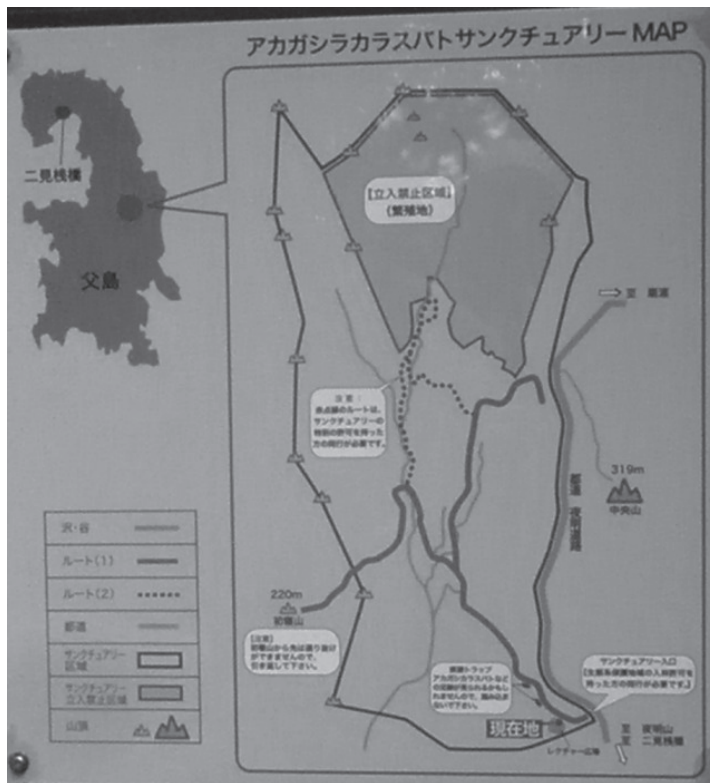


図4 サンクチュアリー案内板

9. 武田牧場に因む植物名

タケダグサ [シマボロギク] 武田草 *Erechtites valerianifolia*

ウシノタケダグサ 牛ノ武田草 *Erechtites hieraciifolia var. calcioides*

タケダカズラ [ヤハズカズラ] 武田葛 (矢筈葛) *Thunbergia alata*

いずれも日本の外来種である。

タケダグサと命名されたのは非意図的に侵入した外来種が武田牧場で採集されたことによる。1893（明治 26）年に記載報告されている（表 4）（清水、2003）。

ウシノタケダグサは 1912（大正 1）年父島洲崎で採集されている（表 4）。

タケダカズラは養蜂用蜜資源として父島に導入された（延島、2013）。牧場ではなく、養蜂導入者としての武田昌次による可能性もある。

表 4 武田牧場に因む植物名

登録番号	39930	39899
採集地	Bonin	日本 父島 小笠原 洲崎
採集年月日	空白	1912 年 12 月 15 日
採集者	T. Yai	西村
同定情報 ラベル	<i>Senecio boninsimae</i> Yatabe 武田草（方言）	<i>Senecio muninensis</i> Koidz.
同定情報 現行	<i>Erechtites valerianifolius</i> (Wolf ex Rchb.) DC.	<i>Erechtites hieraciifolius</i> (L.) Raf. ex DC. var. <i>cacalioides</i> (Fisch. ex Spreng.) Griseb.
和名	タケダグサ	ウシノタケダグサ

注「植物／UMDB（東京大学総合研究博物館データベース）海洋島植物標本データベース」を編集。
<http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DShokubu/PHPspm2/Japanese/recordlist.php>

Ⅲ. まとめ

武田牧場という地名は、明治開拓初期に日本人開拓者の間で自然発生的に生じたものと思われる。牧場は長くない期間で終了したようだが、その名は語り伝えられている。又、当該土地は、小笠原諸島の自然がよく残され、世界自然遺産地域の核心で、小笠原固有植物の稀産地でもあり、小笠原植物研究史上においても重要な場所である。島民と研究者に伝承されたこの地名は、記憶と記録に留めることが肝要であろう。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、次の機関をはじめ多くの方々の協力を頂き感謝いたします。小笠原総合事務所国有林課、東京都小笠原支庁、小笠原村役場、故津山 尚博士、故小野 幹雄博士、故船越眞樹先生、故福岡 透氏、故モーセス・セーボレー氏、故佐々木卯之助氏、清水善和博士、安井隆弥先生、豊田武司先生、森 英章博士、多数の島民の方々。

文 献

- 著者不詳 (1899) 小笠原島視察復命書 (ハ) 編物ノ原料 第三區の頁. 東京都公文書館蔵.
- 服部廣太郎 (1906a) 小笠原島旅行記 植物学雑誌 No.237: 256.
- 服部廣太郎 (1906b) 小笠原島旅行記 植物学雑誌 No.237: 255.
- 関東森林管理局 / サンクチュアリー (2017)
<http://www.rinya.maff.go.jp/kanto/kanto/ogasawara/sinrinseitaikai/sankutyuari-/index.html>
- 国立科学博物館 (2017) 国立科学博物館 > 標本・資料総合データベース
<http://db.kahaku.go.jp/webmuseum/>
- 正木信次郎 (1927) 小笠原の植物景観と其の森林施業. 大日本山林会報 7月号 NO.537 9.
- 延島冬生 (1998 ~) 父島の山々 > 中央山, 初寝山, 丈蘭山, 夜明山
<http://bonin-islands.world.cocan.jp/yama-chichi.htm>
- 延島冬生 (1999) 小笠原諸島・父島における先住民関係の地名 (2). 太平洋学会誌 82/83: 74.
- 延島冬生 (2013) 小笠原諸島の外来植物: ヤハズカズラ
<http://boninintroplant.cocolog-nifty.com/blog/2013/10/index.html>
- 農林省 (1957) 洋種牛及ヒ蜜蜂移殖ノ件. 『農務顛末六』農商務省農務局, 507-508.
- 小花作助 (1878) 百四六渡島人名簿ノ張紙写. 『小笠原島要録第三編』小笠原諸島史研究会, 140.
- 小野田元瀧 (1888) 『小笠原島誌纂』小笠原島庁, 398.
- 清水建美編 (2003) 『日本の帰化植物』平凡社, 208.
- 清水善和 (2009) 小笠原諸島父島の乾性低木林における 31 年間の個体群変動. 地域学研究 22, 駒澤大学応用地理研究所: 84.
- 東京大学総合研究博物館 (2017) 植物 / UMDB (東京大学総合研究博物館データベース)
海洋島植物標本データベース
<http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DShokubu/PHPspm2/Japanese/recordlist.php>
- 東京府 (1929) 小笠原島総覧 256.
- 豊田武司 (1975a) 小笠原国固有林の植生と学術参考保護林. 東京営林局 39.
- 豊田武司 (1975b) 小笠原国固有林の植生と学術参考保護林. 東京営林局 39: 1-73.
- 豊田武司 (2014) 『小笠原諸島固有植物ガイド』ウッズプレス, 624p.
- 島島恕清 (1938a) 小笠原島の植生並熱帯有用植物に就て. 林業試験報告 36. 農林省林業試験場: 14.

- 豊島恕清 (1938b) 小笠原島の植生並熱帯有用植物に就て. 林業試験報告 36. 農林省林業試験場: 50.
- 豊島恕清 (1938c) 小笠原島の植生並熱帯有用植物に就て. 林業試験報告 36. 農林省林業試験場 寫真第 3 圖表題.
- 津山 尚 (1935) 小笠原植物新考 II (摘要). 植物学雑誌 Vol.49 No.583. 481.
- 津山 尚 (1969) 小笠原諸島の植物. 小笠原諸島自然景観調査報告書. 東京都建設局公園緑地部.
- 津山 尚 (1970a) 小笠原諸島の植物. 続小笠原諸島自然景観調査報告書. 東京都建設局公園緑地部.
- 津山 尚 (1970b) 小笠原諸島の植物. 続小笠原諸島自然景観調査報告書. 東京都建設局公園緑地部, 124-125.
- 津山 尚 (1970c) 4 植物. 津山 尚・浅海重夫編著 (1970) 『小笠原の自然・解説編』, P1. 4-6.
- 津山 尚 (1970d) 4 植物. 津山 尚・浅海重夫編著 (1970) 『小笠原の自然・解説編』, P1. 4-8.
- 津山 尚・浅海重夫編著 (1970) 小笠原の自然・原色写真編 解説編全 2 卷 廣川書店.
- 山方石之助 (1906) 『小笠原島志』 東陽堂支店, 613-615.